岐阜経済大学論集 33 巻 3 号（1999 年）

ピエール・ルルーとサッカレー

――「資本主義」語のはじまり（2）――

重　田　澄　男

I.「資本主義」語のはじまり
II. ピエール・ルルー
　1. 人物と社会的活動
　2. ルルー『マルサスと経済学者たち』
　3. ルルーにおける「資本主義」語
　4. 1849 年版における「資本主義」語の消失
　5.「社会主義」という用語とルルー
　6. ルルーとマルクスとのかかわり
III. サッカレー
　1. 人と作品
　2.『ニューカム家の人びと』における「資本主義」語
　3. マルクスのサッカレー評
IV. 使われはじめの時期の「資本主義」語

I.「資本主義」語のはじまり

「資本主義」という言葉が使われはじめたのは，1850 年前後のことである。

フランスにおいては，この時期は，1789 年のフランス革命の記憶がまだ生きつづけながら，1830 年の 7 月革命，1848 年の 2 月革命といった政治革命の嵐が繰り返し展開しており，同時に，経済過程においては，19 世紀の

初頭から1840年代にかけて繊維産業とりわけ綿紡績業を中心に産業革命がおしすすめられ資本家的生産様式が展開していった時期であった。そのように，1830～40年代には，綿工業における機械制大工業は急速に拡大していたけれども，麻製品や絹製品の生産においては手工業的小経営が依然として存続しつづけており，また，製鉄業が急速な発展をとげるようになるのはやっと1850年代になってからであった。

他方，イギリスでは1820年代半ばには産業革命はすでに完了しており，1830年においてすでに綿工業と製鉄業との第I部門・第II部門の両分野における機械制大工業による資本家的生産様式は確立していて，世界にたいする支配力を強めつつその最盛期の展開をすすめて「世界の工場」としての急速な経済的発展をとげているところであった。イングランド北東部に石炭輸送専用の鉄道が開通したのは1825年のことであるし，リバプールとマンチェスターのあいだに世界最初の客車鉄道が開通したのは1830年のことであって，それにつづく1840年代は鉄道建設ブームの時代となっている。

そのように発展程度の相違はあるとはいえ，1830～40年代には，フランスにおいても，イギリスにおいても，資本家的生産は現実的に急速に展開して，労働者階級の労働条件や生活環境の劣悪な事態や，貧富の差の拡大，利潤獲得をめざす資本家的経営のあり方は，人びとの目に直接に見えるようになってきている時代であった。エンゲルスが『イギリスにおける労働者階級の状態』を出したのは1845年のことである。

そして，この時期には，そのような近代社会の現実的諸事態にたいする批判的な思想としての社会主義的思想がすでにさまざまなかたちで広まってきており，フランスでは，未来の産業社会としての生産者の“協同社会”を構想したサン・シモンの『産業体制について』(1821年）や，フーリエの『家庭的農業的協同社会論』(1822年）が，そして，イギリスでは，失業問題の根本的解決のために共産主義的協同体の建設を提案したロバート・オーエンの『ラナーク州への報告』(1821年）などの社会主義的主張をもりこんだ諸文献

が出版されており，さらにいえば，「社会主義」(socialism, socialisme) という用語も 1830 年代にはすでに登場していたのである。

そのような近代的な資本主義的経済諸関係の現実的展開と，それにたいする批判的見解としての社会主義的諸思想の浸透のなかで，1850 年前後の時期に，フランスと，そしてイギリスにおいて，資本主義的経済関係における「資本」や「資本家」のあり方と結びついた現実的事態の把握と関連したかたちで，「資本主義」(capitalism, capitalisme) という言葉が使われはじめるようになる。

ところで，そのような「資本主義」語を使いはじめた人物や著書の探索と，そのなかの代表的存在であるルイ・ブランの『労働組織』(第 9 版) における「資本主義」語の使われ方については，すでに「ルイ・ブランと「資本主義」――「資本主義」語のはじまり (1) ――」(『岐阜経済大学論集』第 33 巻第 2 号，1999 年 9 月) において取りあげたところである。それにひきつづいて，本論文においては，ルイ・ブランに前後して「資本主義」という用語を使っているピエール・ルルーとサッカレーについて見ていくことにしたい。

II. ピエール・ルルー

1. 人物と社会的活動

ピエール・ルルー (Pierre Leroux, 1797–1871) は，一時期サン・シモン主義に傾倒したフランスの初期社会主義者であり，多面的なかたちで政論，哲学，文芸批評にいたるまでの幅広い文筆活動をおこなうとともに，政治的にも活動した人物である。

ルルーは，貧困のため理工科大学を中退し，印刷工を経て，1824 年に *Le Globe*（『地球』）紙の編集者 (1824–31) となるが，次第にサン・シモン主義の影

響を受けるようになる。その結果，1830年の7月革命の後には，同紙はサン・シモン派の機関紙となったといわれている。だが，その後，1831年に，ルルーはサン・シモン派から脱退し，そののち，*Revue encyclopédique*（『百科全書評論』）誌の編集（1831–35）をおこない，そして，ジャン・レーノー（Jean Reynaud, 1806–63）とともに *Encyclopédia nouvelle*（『新百科全書』）8巻（1834–41）を刊行し，またジョルジュ・サンド（George Sand, 1804–76）などと *Revue indépendante*（『独立評論』）誌を創刊・編集（1841–42）した。さらに，『平等論』（1838年），『人類，その本質と将来』（1840年）を出版したが，1845年にはみずから *Revue sociale*（『社会評論』）誌を発刊・編集（1845–50）し，『金権政治』（1848年）ではフランスにおける資本の集中と階級分化の実態を統計資料によって明らかにし，さらに，『マルサスと経済学者たち，貧乏人はいつでもいるのか？』（1848年）[1]を世に問うた。

なお，ルルーは，*Revue encyclopédique*（『百科全書評論』）誌の1833年10月号に掲載した論文において，フランスで初めて「社会主義」（socialisme）という言葉を使用した，といわれている。

また，ルルーは，2月革命がおこなわれた1848年に立憲議会議員に，翌年には立法議会議員に選出されている。だが，1851年のナポレオン3世のクーデターのため，イギリスに亡命することになる。1859年に大赦により帰国したが，その後は政治的な活動はおこなわなかったとのことである。

〔主な著書〕[2]

① *De l'Egalité*. 1838.『平等論』

② *De l'Humanité, de son principe, et de son avenir*. 2巻，1840.『人類，その本質と将来』

③ *Discours sur la situation actuelle de la société et de l'esprit humain*. 2巻，1841.『社会と人間精神の現実的状況について』

④ *D'une Religion nationale, ou du Culte*. 1846.『国民の宗教』

⑤ *De la Ploutocratie, ou du gouvernement des riches*. 1848.『金権政治』

⑥ *Du Christianisme et de son origine démocratique*. 2巻，1848.『キリスト教主

義と民主主義の起源』

⑦ *Malthus et les économistes, ou, y aura-t-il toujours des pauvres ?* 1848.『マルサスと経済学者たち』

⑧ *Projet d'une constitution démocratique et sociale.* 1848.『社会の民主主義的組織の計画』

⑨ *La Grève de Samarez.* 2巻，1863–64.『サマレのストライキ』

2. ルルー『マルサスと経済学者たち』

ピエール・ルルーの『マルサスと経済学者たち』は，第1部「時代のユダヤ王たち」において1789年のフランス大革命による王制の崩壊後の60年のあいだにおける現実世界における産業崇拝と金銭崇拝のブルジョアジーの時代の展開を，第2部「政治経済学と福音書」において非人間的なマルサスの政治経済学を問題にしたものである。

この1848年に出版されたルルーの『マルサスと経済学者たち』のなかに「資本主義（capitalisme）」という用語が使われていると，ジャン・デュボアの『フランスにおける政治的・社会的用語集』[3)]は指摘している。

しかし，このルルー『マルサスと経済学者たち』の1848年発行の初版は，わが国ではその所在を確定することができず，現物を目にすることができなかった。

ところで，デュボアの『フランスにおける政治的・社会的用語集』は，ルルーの『マルサスと経済学者たち』における「資本主義」用語についての指摘にあたって，「1848 P. Leroux, Malthus et les economistes, 25, in Evans, op. cite., 81.」[4)]と記していて，「資本主義」という言葉を使用したルルーの叙述についてはEvansの著作の81ページを参照するよう指示している。Evansの著作とは，David Owen Evans, *Le socialisme romantique — Pierre Leroux et ses contemporains*, 1948, Paris. のことである。

Evansは，ルルー『マルサスと経済学者たち』について，“Parut d'abord

dans la R.S. (1845–46). Editions postérieures : 1849, Boussac et Paris ; 1897, Paris, 2 vols. in-32"[5] と指摘している。すなわち，この『マルサスと経済学者たち』は，まず1845年から1846年にかけて *R.S.* すなわち『社会評論』誌（*Revue sociale*）に発表され，1848年に著書として出版された後に，1849年にBoussacとParisで，1897年にParisで2巻本として出版された，としているのである。

1848年発行の本書の初版本の出版された場所はブーサック（Boussac）となっているが，1849年の再版本はブーサックとパリとの2カ所で発行されたものとしている。そして，現物のコピーを目にすることのできたブーサック（Boussac）で出版された1849年版（東北大学図書館所蔵）を見ると，扉の下部に「ピエール・ルルーによる印刷（Imprimerie de Pierre Leroux）」としている。このルルー『マルサスと経済学者たち』は，ルルーの自費出版として出されたものかもしれない。

ところで，1848年の初版本での叙述としてEvansが部分的かつ細切れ的に引用しているものと，現物の全体を見ることのできる1849年版における叙述とは，かなりの違いがあるようである。

しかも，そのような1848年の初版本と1849年の再版本との違いは，問題にしている「資本主義」用語の使用のあり方に直接に関連しているのである。

3. ルルーにおける「資本主義」語

Evansの引用しているところによれば，1848年に出版されたルルーの『マルサスと経済学者たち』初版においては，その25ページに，「わたしは，資本主義（capitalisme）の鞭のもとで労働する鎖につながれた諸国民をみる」（Je vois les nations enchaînées, travaillant sous la verge du capitalisme）という叙述がある。

これは，第1部「時代のユダヤ王たち」のなかの第III章「産業崇拝，金

銭崇拝」のなかの叙述である。

「現代は産業を崇拝している。バスティーユ監獄は，非常に多くの人たちが綿織物を売りそしていくらかを消費することを可能ならしめているように思われる……。資本家の産業は，わたしにはブレスト (Brest) あるいはトゥーロン (Toulon) からのガリー船〔徒刑場〕のような印象をうける。わたしは，資本主義の鞭のもとで (la verge du capitalisme) 労働する鎖につながれた諸国民を見る。」[6)]

このようなかたちで，1848 年に，ルルーの『マルサスと経済学者たち』初版において「資本主義 capitalisme」という言葉が使用されたということは，これまでの点検のかぎりでは，文献史的に見て，書籍における「資本主義」という言葉の使用はルルーが初めておこなったものである，ということを意味することになる。

というのは，ルイ・ブランが『労働組織』において「資本主義」という言葉を使ったのは第 9 版であるから 1850 年ということになるし，後に見るようにサッカレーが『ニューカム家の人びと』において英語で「資本主義 capitalism」という言葉を使ったのは 1854 年である。したがって，少なくともこの三者のなかで「資本主義」という言葉を最初に使ったのは，1848 年の『マルサスと経済学者たち』初版におけるピエール・ルルーであったということになる。

ところで，ルルーは，「資本主義 capitalisme」という新しい言葉を，いかなる文脈のなかで，いかなる意味内容におけるものとして，使っているのだろうか。

ルルーは，『マルサスと経済学者たち』の初版において，「資本主義」という用語を使う直前に，「資本家 (capitaliste) の産業は，ブレストあるいはトゥーロンからのガリー船〔徒刑場〕のような印象をうける」といったかた

ちで「資本家（capitaliste）」という用語を使って「資本家の産業」という場所についての限定をおこないながら，それにつづけるかたちで，その「資本家の産業」における事態について，「資本主義」という言葉を使って「資本主義（capitalisme）の鞭のもとで労働する鎖につながれた諸国民を見る」という叙述をおこなっているのである。

そのように，ルルーによる「資本主義」という言葉は，近代社会の資本家的経営がおこなわれている産業において「資本家」が労働者たちを使役しているあり方を表現するものとして，「資本主義の鞭のもとで〔の〕労働」というかたちで「資本主義 capitalisme」という抽象名詞を使っているのである。

だからして，ルルーが『マルサスと経済学者たち』の 1848 年の初版において使っている「資本主義」という新しい言葉は，ルイ・ブランの場合のように「資本」についての「排他的専有」といった特有の状況についての事態を表現するものとまったく違っている。

ルルーの場合には，「資本主義」という新しい言葉は，ルイ・ブランのようになんらかの新しい特有の独自的意味をもたされたものとして使われているものとは思われない。ルルーによる「資本主義」という用語は，その直前に使用した「資本家の産業」というかたちでの「資本家」という言葉に触発されながら，「資本家」あるいは「資本家的経営」の鞭のもとでの労働と同じ意味内容の言葉として使われているのである。

すなわち，ルルーが『マルサスと経済学者たち』の 1848 年の初版において使用した「資本主義 capitalisme」という新しい用語は，内容的には，「資本家 capitaliste」あるいは「資本家的経営」と同じ意味内容をもつものとして使われている，といってよいようである。

4. 1849 年版における「資本主義」語の消失

ところで，ルルーが『マルサスと経済学者たち』の初版を出した翌年の

1849年に出版した再版本においては，1848年の初版本において使われていた「資本主義」という用語は消失している。

ルルーが1849年に再版した『マルサスと経済学者たち』においては，「資本主義」という言葉が組みこまれていた文章は，1848年の初版におけるように25ページではなくて，28ページであって，それは次のように1848年の初版本とは異なる内容と説明をもりこみながら叙述がおこなわれているのである。

「なんと！ 産業とは生き生きとした人間の活動の局面ではないのか！ 人間は，感覚（センセーション）—感情（センチメント）—知性である。人間は，感情と知性だけではない，感覚でもある。社会の産業は，人間活動のひとつの表現である。けれども，資本家の産業（Industrie capitaliste）は，わたしにはブレスト（Brest）あるいはトゥーロン（Toulon）からのガリー船〔徒刑場〕のように見える。わたしは資本家たちの鞭のもとで（la verge des capitalistes）労働する鎖につながれた諸国民を見る。わたしは，どんな人間の表現も軽視しない，けれども，わたしはなによりもその精神を全体として愛し欲するのである。わたしは死体のような人間を愛さない。わたしは奴隷となっている……人間を愛さない。」[7)]

そのように，1849年版の『マルサスと経済学者たち』においては，Je vois les nations enchaînées travaillant sous la verge des capitalistes となっている。そこでは，「capitalisme 資本主義」の代わりに「capitalistes 資本家たち」という言葉が使われていて，「わたしは資本家たちの鞭のもとで労働する鎖につながれた諸国民を見る」という表現になっているのである。

このように1849年に出した再版の『マルサスと経済学者たち』において，ルルーは，1848年の初版において使った「資本主義 capitalisme」という言葉の使用を取りやめて，それを「資本家たち capitalistes」という言葉に

置き換えているのである。

このことはなにを意味するのだろうか。

『マルサスと経済学者たち』の1848年の初版本において，ルルーは，近代社会の産業において労働者たちを使役している「資本家たち」のありようを，「資本主義」という抽象名詞による一般状況を示す新しい用語を使って，「資本主義の鞭のもとで〔の〕労働」というかたちで示したのである。だが，ここで使われた「資本主義」という新しい用語は，特有の独自的意味をもつものではなくて，「資本家たち」あるいは「資本家的経営」と同じ意味内容をもつものとして，資本家ないし資本家的経営の「鞭のもとでの労働」という内容を描写するものとして使われたものであった。そして，翌年の1849年の版においては，「資本主義」という新しい用語を取りやめて，当時すでに一般に普及しておりルルー自身もその直前に「資本家の産業」というかたちで使っている「資本家たち」という用語に置き換えたのである。いってみれば，この個所において，ことさらに「資本主義」という新しい造語を使う必要はないとルルーは考えた，と理解してよいのではないかと思われる。

その点から見ても，ルルーが『マルサスと経済学者たち』の1848年の初版において使用した「資本主義 capitalisme」という新しい用語は，内容的には，「資本家たち capitalistes」と同じ意味内容をもつものであり，それは「資本家たち」と同義の言葉として置き換えてもかまわないものとして使われたものである，ということができるであろう。

5.「社会主義」という用語とルルー

ところで，ピエール・ルルーは，そのように「資本主義」(capitalisme) という言葉を最初に使った人物であるというだけではない。「社会主義」(socialisme) という用語もまた，ルルーが創始者であると多くの人たちによってみなされているのである。

すなわち，「社会主義」(socialisme) という言葉は，ルルーが，*Revue encyclopédique*（『百科全書評論』）誌の 1833 年 10 月号に掲載した論文において，フランスで初めて使用したものである，という見解がほぼ一般的な理解となっている。

たとえば，阪上孝氏は，『フランス社会主義』(1981 年) において，「はじめて〈社会主義〉という言葉を用いた〔のは〕ルルーの……論文（『ルヴュ・アンシクロペディク』1833 年 10 月号）〔である〕」[8] と指摘されている。同様な指摘は，『岩波 哲学・思想事典』における「『百科全書評論誌』の 1833 年 10 月号の論考で，ルルーはフランスで初めて〈社会主義（socialisme）〉という語を個人主義に対立する概念として用いている」[9] という説明や，あるいは，『世界名著大事典』の「ルルー」の項目におけるルルーは「社会主義という言葉をはじめて用い，社会主義の父とよばれる」[10] といった言及などにも見られるところである。なお，この点にかんする異説については，後でまた触れなおすことにする。

ところで，そのように「社会主義」という言葉が 1830 年代の前半期に使われはじめるようになり，それにたいして，「資本主義」という言葉が 1850 年前後になってやっと使われるようになったということは，現実的事態の展開の順序とそれにたいする表現用語の形成の順序との照応ということから見ると，いささか奇妙な事態である。

だが，そのことは，現実的事態そのものの発生・展開の順序と，それを表現する言葉の成立の順序との，非相関的な関係についての一つの興味ぶかい事例を示しているといえるかもしれない。

すなわち，「資本主義」と「社会主義」とは，現実的事態における歴史的順序としては，資本主義の生成と発展の後に社会主義は志向され打ちたてられたものであって，そのように社会主義は資本主義の矛盾の展開のうえに成立する生産形態と社会体制であるにもかかわらず，それらを表現するものとして生みだされ使われるようになった用語としては，「社会主義」(socialisme)

という用語の方が「資本主義」(capitalisme) という用語よりもより以前につくられ，使われているのである。

そのことをルルーにそくしていえば，ルルーは，1833年10月号の『百科全書評論』誌において「社会主義」(socialisme) という用語を使ったのであるが，それから15年も後の1848年の『マルサスと経済学者たち』において初めて「資本主義」(capitalisme) という用語を使っている，ということである。

このことは，近代社会にたいする批判的見地としての「社会主義」思想の確立とそして「社会主義」というその用語の確定の後に，社会主義的見地にたって近代社会における現実的事態にたいする批判的把握をおこなうなかで，「資本主義」という内容把握と用語の確定がおこなわれることになったということである。そのため，用語法の確定は現実的事態の展開の歴史的順序とは逆の順序でおこなわれることになったのである。

なお，ルルーの場合，彼が初めて「社会主義 (socialisme)」という言葉を使ったときは，その「社会主義」という用語は，「資本主義」的な近代社会に対立するあらたな経済制度や社会体制についての用語としてではなくて，「個人主義」(individualisme) に対比するものとしての意味内容においてうちたてられ使われたものである，といわれている。

すなわち，ルルーが「社会主義」という言葉を使いはじめた当初における意味内容としては，近代的な産業化とともに拡がってきた物質的利益至上主義と利己主義という道徳的退廃をひきおこした原因は〈個人主義〉にあるものと見て，そのような近代社会の病患としての〈個人主義〉にたいして対峙する対比的な極端な思想が〈社会主義〉と呼ばれるものであるとしていた，といわれている[11]。そして，その後1830年代半ばにいたって現在使われている近代社会を批判的に変革する社会体制の意味あいにおいて使われるようになった，とのことである。

なお，「社会主義」という言葉はルルーが *Revue encyclopédique* 誌の1833

年10月号に掲載した論文で初めて使った言葉であるという理解については，その年次についても，使用者についても，かならずしも確定的な事実ではないとする見解もいくつかある。

OED（*Oxford Englisch Dictionary*）は，「社会主義」という用語の使いはじめについて次のように指摘している。

「この言葉の初期の歴史はいささか曖昧である。フランスでの社会主義の最初の使用は，1832年2月13日の *Globe* 紙において出現したが，そこではそれは個人主義との対比で使われていた。その近代的な意味においては，それは Leroux や Reybaud によってその3年あるいは4年後のうちにさまざまに主張された。……」[12)]

あるいはまた，「社会主義」という言葉のそもそもの初めての使用はイギリスである，という説もある。稲子恒夫氏は次のようにいわれている。「社会主義という言葉は，まず最初に1827年にイギリスのオーエン派の出版物に socialism として登場し，これとは独立して32年にフランスのフーリエ派の出版物に socialisme として登場した。ヨーロッパ諸国の社会思想に大きな影響を与えたのは，フランスの socialisme なので，フランス語がヨーロッパ語系諸国の社会主義を示すことばの共通語源とされている」[13)]。

だが，それにたいして，Sanford Allan Lakoff は，「現在用いられている意味での『社会主義者』(socialiste) という言葉は1827年に初めて，産業改革者であるロバート・オーエンの継承者によって発行された *Corporative Magazine* 誌上で活字になって登場した。その言葉は1832年に『社会主義 le socialisme』となってドーバー海峡を渡り，サン・シモンの理論に触発された実践的で空想的な改革者団体の刊行物 *Le Globe* に登場した」[14)]と，イギリスにおいて1827年のオーエン派の出版物に登場したのは「社会主義 socialisme」という用語ではなくて「社会主義者 socialist」という言葉であった，として

いる。

「社会主義」という用語の始まりについてのさらなる探索については，別の研究にゆだねたい。

6. ルルーとマルクスとのかかわり

マルクスより約20歳年上のルルーは，マルクスやエンゲルスが社会主義，共産主義に傾倒するようになるずっと以前からサン・シモン主義的な社会主義の立場にたった理論家として活躍しており，マルクスにとっても，エンゲルスにとっても，当初はそれなりの評価をあたえた存在だったようである。

マルクスは，大学卒業後しばらくして編集者になった『ライン新聞』の第289号（1842年10月16日）に，まだ共産主義思想にたいしては批判的な青年ヘーゲル派の立場でしかなかった時期に，「共産主義とアウグスブルグ『アルゲマイネ・ツァイトゥング』」と題して共産主義についてコメントしているが，そのなかで次のようにルルーにも言及した指摘をおこなっている。

「『ライン新聞』は，今日の姿における共産主義思想にたいしては，理論的な現実性さえみとめておらず，したがって，それの実現はなおさらねがっておらず，あるいはこれを可能とさえ考えることができないのであるから，これらの思想にたいして根本的な批判をくわえるであろう。しかし，ルルーやコンシデランの著書，とりわけプルードンの明敏な労作のような著書は，そのときどきの皮相的な思いつきによってではなく，長期にわたる，深遠な研究のあとではじめてこれを批判できるという〔ものである〕。」[15)]

さらに，マルクスは，1843年10月3日付けのフォイエルバッハ宛ての手紙のなかで，「シェリング氏はいかに巧妙にフランス人を手なずけたことでしょう。最初に頭の弱いクザンを，またのちには天才的なルルーさえも。つ

まりピエール・ルルーやその一派にとっては，いまなおシェリングは，超越的観念論のかわりに理性的実在論を，抽象的思想のかわりに血のかよった思想を，専門哲学のかわりに世界哲学をうちたてた人間とみなされています！」[16]と書いており，この時点ではピエール・ルルーにたいして批判的ながらも積極的な評価をしていたことが分かる。

また，マルクスよりも2歳年下にもかかわらずマルクスよりも早く社会主義の立場に到達したエンゲルスは，イギリスのオーエン主義者の週刊誌『ザ・ニュー・モラル・ワールド』の第19号（1843年11月4日）に，「大陸における社会改革の進展」と題した論文を掲載して，近代社会の変革による共同所有を基礎とした共産主義の主張を一般的かつ必然的なものとして主張しているが，そのなかでルルーにも触れながら次のように述べている。

「共産主義の勃興は，フランスの有名人の大部分によって，喜びむかえられた。形而上学者ピエール・ルルー，女性の権利の果敢な擁護者ジョルジュ・サンド，『信者のことば』の著者ラムネ師，およびその他きわめて多くの人が，多かれ少なかれ共産主義の主張にかたむいている。けれども，この方向でのもっとも重要な著作家はプルードンという青年であって，彼は2,3年まえに『財産とはなにか』という著書を出版し，そこにおいて『財産とは盗んだものだ』と答えたのである。」[17]

このように，マルクスもエンゲルスも，1840年代の前半の時点においては，社会主義・共産主義思想家としてルルーにたいしてそれなりの評価をしている。

しかし，その後，1845年から46年にかけてマルクスとエンゲルスとが共同で唯物史観を確定しながら観念論的な真正社会主義にたいする批判をおこなった『ドイツ・イデオロギー』のなかでは，シュティルナーの共産主義批判に関連してペレールの「所有は廃棄されるのではなくて，その形態が変え

られる，それははじめて真の人格化になるであろう」という言説を取りあげながら，「フランス人によって持ち出され，ことにピエール・ルルーによって誇張されたこの文句は，ドイツの思弁的な社会主義者たちによって大満足でとりあげられ，いっそう思弁しぬかれて，ついには反動的な策謀と実践上の巾着切りとにきっかけを与えた……」[18]と，ルルーのサン・シモン的な観念論的な社会主義にたいしてかなり批判的になっている。

その後，マルクスは，1849年12月19日付けのヴァイデマイアー宛ての手紙のなかで，「プルードン，ブランおよびピエール・ルルーとのあいだの口論について君はどう思っているか？」[19]とか，あるいは，1852年3月25日付けのヴァイデマイアー宛ての手紙で，「L. ブラン，ピエール・ルルー，カベ，マラルメらの社会主義者たちは手を組んで，ひきがえるのL. ブランが起草した憎しみあふれる抗弁を発した」[20]とか，同3月30日付けのエンゲルス宛ての手紙における「ちびのL. ブランは，ここで同時に名誉を回復して出しゃばるチャンスを見てとって，カベ，ピエール・ルルー，ビアンキ，ナドー，ヴァスベンテ（プルードン派）を呼び集めた。『モーニング・アドヴァタイザー』紙上で彼らはマッツィーニ氏を最も荒っぽく攻撃した。彼らの返答の理論的な部分は，マッツィーニの攻撃とほとんど同様に弱かった。人身攻撃の部分のためにはマッソルがルルーに材料を提供した……」[21]といったかたちでルルーに触れているが，しかし，そこで取りあげられているのは社会主義者たちのあいだの内輪もめや抗争にかかわる話題であって，理論的に問題にしているところはほとんど見られない。

そして，その後はもはや論稿においても書簡においてもルルーは問題になっておらず，1871年の第1インターナショナルの総評議会におけるマルクスの演説での言及と，そして，1885年10月28日付けのベーベル宛てのエンゲルスの手紙における「フランス人にたいする君の評価は，思うに，あまり公正ではない。パリの大衆は，長年のあいだにプルードン，ルイ・ブラン，ピエール・ルルー等から蒸留されてできた，いくぶん中性的な平均的社

会主義という意味で『社会主義的』なのだ」[22]という言及があるにとどまっている。

これまで見たように，マルクスとそしてエンゲルスは，1840年代の前半の時期にはルルーの社会主義的見解についてそれなりの評価をしているものの，1840年代半ば以降においては，ルルーについては，その理論的内容とりわけ現実の資本主義的経済関係についての理論的把握については，まったく問題にしていない。

すなわち，ルルーが「資本主義」という用語を使った1848年の『マルサスと経済学者たち』を出版した時期には，ルルーとプルードンやルイ・ブランなどとの論争やもめごとについては問題にしているものの，理論についても，近代社会についての現実分析についても，まったく気にしていないようである。

ルルーが「資本主義」という用語を使った『マルサスと経済学者たち』については，マルクスはこれを読んだかどうかは明らかではないけれども，ルルーによる「資本主義」という新しい用語と概念についてまったく問題にしている気配は見られない。

すなわち，1848年のルルーの『マルサスと経済学者たち』による「資本主義」という新しい用語にマルクスが接触しなんらかの影響を受けた気配はない，と判断してよいものと思われる。

III. サッカレー

1. 人と作品

サッカレー（William Makepeace Thackeray, 1811–63）は，ディケンズ（Charles John Huffam Dickens, 1812–70）とならんで，19世紀のビクトリア時代のイギリ

ス文学を代表する小説家である。

サッカレーは，1811年に，東インド会社の財務官のひとり息子としてインドのカルカッタに生まれた。4歳のとき父親が死亡。翌年再婚する母親と別れてイギリス本国に送り返され，叔母の家で養われ，そののち寄宿舎生活を送る。そのため，金に困ることはなかったが，家庭の暖かい空気に触れることなく育った。ケンブリッジ大学で法律を学ぶが，勉強に打ち込めず中退し，ドイツやフランスに放浪して文筆や絵画の修行をする。

世間知らずのため，友人から道楽の負債を押しつけられたり，はては1833年に『ナショナル・スタンダード』紙を買収させられて1年後に破産，父の遺産を22歳にしてすべて失ってしまう。やむなく，生活のために，挿絵を描いたり，新聞のパリ通信員をしたりして細々と暮らしていたが，1836年パリで知り合ったイザベラ・ショーと結婚してロンドンに帰り，文筆と戯画の才能で生計を立てようとする。

だが，1840年，妻が産後に個人的・家事的プレッシャーから発狂したため，精神病院への妻の入院治療と2人の娘を他人に預けての養育が必要になり，そうした費用をすべて自分で稼がねばならなくなって，生活苦のなかで評論，戯作，小説と書きまくった。この時期に書いて『パンチ』などに寄稿した挿絵入りの戯文や風刺的な小説は，『イギリス俗物（スノッブ）列伝』（1847年）など当時流行の成り上がり根性のスノッブを風刺したものが多い。「スノッブ」という言葉も，そこから広く知られるようになったものである。

やがて，1847年から48年にかけて出した『虚栄の市』は，貧しい孤児の身から美貌と狡知によって上流階級の社交界に乗りだすベッキーと裕福な商人の娘でおとなしいアミーリアとの学校友達の2人の人生行路を対比させながら描いた長編小説であって，19世紀の上流・中流階級の虚栄に満ちた俗物根性への鋭い風刺がひろく評判になり，一躍文壇に認められることになった。

さらに，18世紀の貴族社会の風俗を描いた長編歴史小説『ヘンリー・エズ

モンド』（1852年）や，19世紀のイギリスの上流・中流階級が外面的にはともかく内実においては地位と富をめざして冷たいものであることや，愛のない便宜的結婚などを痛烈な筆致で取りあげて描いた『ニューカム家の人びと』（1853–55年）等によって，サッカレーは大作家としての揺るぎない地位を固めることとなった。

さらに，1860年には『コーンヒル雑誌』の発刊にあたって初代編集長となり，イギリス文壇の重鎮としての地位を示したが，1863年，心臓病のため52歳で急死した。

サッカレーの作品の特徴は，社会風俗とさまざまな俗物の生態の生き生きとした描写，痛烈な風刺と世間知とのバランスなどにあるといわれている。そのように，サッカレーの主題は，下層社会を描くディケンズと違って，上流・中流社会における俗物性へ向けられていることが多い。

サッカレーのライバルとみなされることの多いディケンズは，少年時代から極貧生活のなかで学校にもろくに通えず，12歳から町工場に働きに出されて，独力で生活の糧を稼ぎながら，法律事務所の走り使い，速記者，新聞記者と，社会の階段を駆け上がりながら，作家としての地位を確保したものである。

そのようなディケンズの小説は，19世紀前半のイギリスの繁栄の裏の恐ろしい貧困と，非人道的な労働の酷使という，社会の矛盾と不正を肌身で体験したディケンズの若き日々の生活に裏打ちされたものである。ディケンズは，みずからの体験で知った社会の下積み生活とその哀歓，世の中の不正と矛盾にたいする真っ向からの指摘を，ユーモアを交えながら作品にした。そのようなディケンズの小説は，養育院から逃亡した孤児オリバーの物語『オリバー・トゥイスト』（1838年）や，『クリスマス・キャロル』（1843年），あるいは自伝的長編小説『デビッド・カパーフィールド』（1849–50年），孤児ピップの生涯の物語『大いなる遺産』（1861年）などによって示されている。

それに比して，サッカレーの作品は，1840〜70年代にその〈黄金時代〉

を迎えたビクトリア時代のイギリスにおいて，工業化と都市化の進行のなかで勢力を増大させた中流階級としてのブルジョアジーが，経済と政治の重要な担い手となりつつあるにもかかわらず，社会の階層的秩序のなかにおいては地主階級と貴族がなお支配階級としてその地位を維持しつづけているなかで，上層中流階級における成り上がり志向の意識と行動におけるそのスノッブ（俗物）根性に焦点をあてながら，それを痛烈に描いたものである。

2.『ニューカム家の人びと』における「資本主義」語

サッカレーの『ニューカム家の人びと』は，ペンギン・ブックスでも847ページもの大部の長編小説である。

この『ニューカム家の人びと』は，インド帰りのニューカム大佐とその息子クライブを中心とした物語であるが，ニューカム一族には，ニューカム大佐の義理の双子の兄弟であって銀行を経営しているブライアン（準男爵）とホブソン，そしてブライアンの息子のバーンズ，娘のエセル，エセルの祖母にあたるキュー夫人などがいる。

ニューカム大佐の息子クライブは，大学卒業ののち画家を志し，父のお気に入りのエセルに心を寄せるが，エセルの家族はクライブの画家志望を軽蔑しており，エセルを貴族と結婚させようと考えていて，クライブとエセルとの結婚には反対である。そして，ブライアンの息子バーンズは伯爵令嬢クレアラと結婚するが，不幸な結婚でしかなく，冷たい関係と暴力沙汰のあげくクレアラは家から逃げ出して離婚することになる。……

といったかたちで物語は進行していくのであるが，そのなかでブルジョアとして中流階級たる銀行家が上流階級たる貴族との縁組みによってより高い社会的地位を確保したいという欲求とブルジョア的打算，そして，それにたいする貴族の側の利害損得への執着が，さまざまなかたちで繰り広げられる

ことになっている。

そして，そのような筋書きの進行のなかで，次のような描写がでてきて，そのなかで「資本主義 capitalism」という言葉が使われている。

「Sam Higg，彼の名前はイギリス―大陸間〔鉄道〕の理事会と結びついて《マンチェスターとロンドンにおける取引所》において非常に信用のあるものであった。兄は，彼らのあいだに金を残して最近死んでおり，彼の富は Florac 夫人の財産にかなりのものを付け加えた。彼女は，資金の一部を夫の名義で鉄道に投資していた。株券は額面以上であって，いい配当金を与えた。Prince of Montcontour は，パリの理事会では非常な厳格さでその地位を占めており，バーンズはそこへしばしば忙しい訪問をおこなっていた。資本主義（capitalism）のセンスは Paul de Florac をしらふにさせ，もったいをつけさせた。45 歳にして，彼は，若者であることを事実上あきらめ，そして，チョッキを大きくし，口ひげは少し灰色を示すようになっても，不機嫌ではなくなった。」[23)]

ここで取りあげられているのは，ニューカム家の人びととさまざまなかかわりのある de Florac 家のファミリーの面々である。

いま見た文章の冒頭にでてくる Sam Higg は，de Florac 夫人の実家である Higg 家の人の名前である。

ところで，de Florac 家の当主たる Comte de Florac は，もともとヨーロッパでももっとも高貴で古い貴族の家系の一員であって，伯爵の称号をもっているが，いまや公爵の称号の正統な所有者でもある。

その妻 Madame de Florac は，実家はマンチェスターの富裕なブルジョアたる Higg 家の出身であって，貴族の称号へのあこがれをもっていたものである。このように，de Florac 夫妻の家は，上流階級としての貴族の家系と，中流階級ながら豊かな経済力のあるブルジョア・ファミリーとが結びついた

家族である。

この夫妻の長男は，伯爵の長男としてのあるいは子爵の称号たる Vicomte をもっている Vicomte de Florac であるが，Prince of Montcontour でもあって，その妻は Madame la Princesse de Montcontour と称されている。そして，次男が Paul de Florac (Abbe) である。

そのように，ブルジョア・ファミリーと結びついた貴族の一家のなかに，ブルジョア化が進行している。

すなわち，当主の de Florac 伯爵は，妻の兄の死去にともなって妻に分与された遺産の一部が自分名義のものとして鉄道株に投資されていて，その株価は上がるし，かなり有利な配当を受けとるようになっている。

長男の Vicomte de Florac (Prince de Montcontour) は，「親切だが浪費的な」性格の持ち主である。だが，銀行家であるニューカム家のホブソン兄弟のなかのブライアンの息子バーンズの強力な意向によって，この「大様な浪費家」たる Prince de Montcontour (Vicomte de Florac) が，ホブソン兄弟が密接な関係をもっている Anglo-Continental Railway (英国—大陸間鉄道) の「フランス委員会」のポストを提供され，それによって貴族の称号付きでニューカム家に呑み込まれ，彼の妻および Higg ファミリーとの調和をはかるようにされている。

そして，そのような家族のなかで，かつて若い頃にはプロテスタントに改宗して両親たる Comte de Florac 夫妻を大いに心配させた次男の Paul de Florac も，45 歳にもなると「資本主義 (capitalisme) のセンス」を身につけて，分別くさい表情や身なりをするようになっている，というのである。

そのように貴族とブルジョアとの結びつきの強まりのなかで，格式にこだわり経済観念にはルーズな貴族の一家においてもブルジョア的な「資本主義のセンス」を身につけるようになっている，というかたちで「資本主義 capitalism」という言葉が使われているのである。

ところで，このサッカレーの『ニューカム家の人びと』の場合には，その

ような「資本主義」という新しい言葉は，叙述の流れとしては，「資本」や「資本家」という言葉が直前に使われてそれに直接に触発されるといったことなしに使われたもののようである。

すでに見てきたように，ピエール・ルルーの『マルサスと経済学者たち』においては，「資本家の産業」における事態についての叙述として，「わたしは，資本主義の鞭のもとで労働する諸国民を見る」と，「資本家」という言葉に触発され結びつけられるかたちで「資本主義」という新しい用語が使われている。

また，ルイ・ブランの『労働組織』（第9版）の場合には，「資本の排他的専有」ということによってひきおこされる事態を「資本主義」という用語によって表現するというかたちで，「資本」との特有の関連におけるものとして「資本主義」という新しい言葉が使われるようになっている。

ところが，サッカレーの『ニューカム家の人びと』においては，内容的にだけでなく，叙述の流れにおいても，「資本主義」という新しい言葉を使用するにあたって手がかりになる言葉としての「資本」も「資本家」もその文章の周辺には存在していない。サッカレーのこの本全体のなかには，ビジネス活動や投資について述べたりしているところもあり，「資本家」という言葉が使われたりしていることもあるが，しかし，そのような叙述や用語は「資本主義」という新しい言葉が使われる文脈のなかにおいては見られない。

さらにいえば，『ニューカム家の人びと』において使われている「資本主義」という言葉は，内容的にも，利潤めあての企業経営活動をおこなう資本家としての経済行為にたいして使われている言葉ではない。

サッカレーは，個人資産の運用として株式投資をおこなうといった資金の投資や，資本主義的企業のポストに就いたりといった事態と並べて，きわめて一般的なブルジョア的気分のことを，「資本主義（capitalism）のセンス」と表現しているのである。

すなわち，サッカレーの『ニューカム家の人びと』における「資本主義」

という言葉は，経済学や社会分析におけるものではなくて，文学作品における描写のなかで使われている言葉であって，ブルジョア的な気分の一般的な表現のありようを示すものとして「資本主義」という概括的な抽象名詞が使われているのである。

その意味では，企業の「資本」や「資本家」と直接的に関連するものとしての意味内容を明確にもつものとしてではなくて，むしろブルジョア的心情を情緒的に表現する言葉として作られ使われているものである。

3. マルクスのサッカレー評

マルクスとサッカレーはほぼ同世代の人間である。

マルクスは，「イギリスの中間階級」なる論文のなかで，イギリスにおける工場主などの中間階級について，その階級的立場からくる労働者階級にたいする抑圧的な行動を論じるなかで，イギリスの小説におけるサッカレーなどの文学者によるリアルな現実描写をきわめて高く評価し，次のように述べている。

「イギリスの小説家の生き生きとした，雄弁な作品は，あらゆる職業的な政治家，政論家，道学者たち全部をあわせたものが口にしたよりもはるかに多くの政治的・社会的真実を世間に伝えてきたが，このイギリスの小説家のいまの立派な仲間たちは，『身分の高い』年金受領者やあらゆる種類の商売を下等とみなす公債所有者から商店主や弁護士書記にいたる中間階級のあらゆる階層を叙述してきた。そしてディケンズとサッカレー，ブロンティ嬢とギャスケル夫人は彼らをどういうふうにえがいただろうか？無遠慮，虚飾，けちな横暴，無知だらけとしてだ。そして文明世界はこの階級に『自分より上のものには卑屈で，自分より下のものには横暴である』という有無をいわせぬ警句をつきつけ，これでもって彼らの評決を確

証したのである。」[24)]

そのように，マルクスは，「一方では貴族階級によって，他方では労働者階級によって封じ込まれている」イギリスの中産階級の，「無遠慮，虚飾，けちな横暴，無知だらけ」であって，上には「卑屈」で下には「横暴」なそのありようを描いているイギリスの小説家として，サッカレーの名前を，ディケンズやブロンテ姉妹，ギャスケル夫人と並べて挙げており，その政治的社会的真実についての生き生きとした描写について高い評価をあたえている。

また，マルクスにとっては晩年の時期たる1879年1月5日付けの『ザ・シカゴ・トリビューン』に発表された雑誌記者によるマルクスのインタビュー記事「現代社会主義の創始者とのインタビュー」のなかで紹介されている「マルクスの書棚の本」のなかにも，「シェークスピア，ディケンズ，サッカレー，モリエール，ラシーヌ，モンテーニュ，ベーコン，ゲーテ，ヴォルテール，ペイン，イギリスやアメリカやフランスの青書類，ロシア語，ドイツ語，スペイン語，イタリア語等の政治上および哲学上の諸著作等々」[25)]があるといったかたちで，サッカレーの作品も並べられていることが示されている。

IV. 使われはじめの時期の「資本主義」語

これまで見てきた1850年前後の時期におけるルイ・ブラン，ピエール・ルルー，サッカレーといった人たちによる「資本主義」という言葉の初めての使われ方は，いかなる特徴と意義をもつものと見るべきものなのだろうか。

まず第1に，「資本主義」という言葉の発生について見ると，「資本主義」

語の使いはじめにあたっての発生の動機と言葉としての意味内容は，1830年代から1840年代にかけての資本主義的経済関係の進展という現実的基盤のうえにあって，資本家的生産様式の展開のなかでの労働者階級の窮状の拡大，利潤追求に狂奔する資本家的企業活動，貧富の差の拡大といった現実的事態を共通の基盤にしながら，そのような事態やそこでの人びとの気分を表現するために使われた新しく作られた言葉である，ということができる。

すなわち，まさに1850年前後の時期に，ルイ・ブランと，ピエール・ルルーと，サッカレーとが，かれら相互のあいだにはおたがいになんらの連関も継承関係もなしに，それぞればらばらのかたちで，しかも，けっして同義の言葉としてではなく，まちまちの意味内容と用語の使い方において「資本主義」という用語が作られ，使われているのである。

時間的順序にしたがえば，まずフランスにおいて，1848年に，初期社会主義者のピエール・ルルーが，『マルサスと経済学者たち』において，「資本家の産業」において「資本主義（capitalisme）の鞭のもとで労働する鎖につながれた諸国民を見る」というかたちで「資本主義」という言葉を使う。そこにおける「資本主義の鞭」という新しい言葉を用いた表現は，「資本家たち」や「資本家的企業」の「鞭」という表現とほぼ同じ意味におけるものとして使われ，しかも，翌年の1849年の再版にあたっては，「資本主義」という新しく使った言葉は引っ込められて「資本家たち」という言葉に置き換えられているのである。

ついで，これまたフランスの初期社会主義者のひとりであるルイ・ブランが，1850年に，『労働組織』の大幅な改訂増補をおこなった第9版において，「バスティア氏の詭弁は，資本の有益性と，わたしが資本主義（capitalisme）と呼ぶもの，すなわち人による資本の排他的占有とを，たえず混同するところにある」と，「資本」を生産要素そのものとみなしながら，そのような「資本」の「排他的占有」という資本主義的私的所有によって資本所有者に収益として利子を獲得させるような事態を，「資本主義」という新しい

言葉でもって示したのである。

そして，1854年に，イギリスにおいて，小説家のサッカレーが，上層中流階級のブルジョア的俗物性が織りなす世相を鋭く風刺しながら描いた『ニューカム家の人びと』において，「Florac 夫人……は彼女の資金の一部を夫の名義で鉄道に投資していた。……〔長男の〕Prince of Montcontour は，〔英国―大陸間鉄道の〕パリの理事会では非常な厳格さでその地位を占めて〔いた〕。……資本主義（capitalism）のセンスは〔次男の〕Paul de Florac をしてしらふにさせ，もったいをつけさせた」というかたちで，貴族の一家における資本主義的経済諸関係との関連の深まりのなかでのブルジョア的分別を「資本主義のセンス」というかたちで表現し，「資本主義」という言葉を一見もっともらしいブルジョア的気分という意味あいにおける文学的修辞において使用したのである。

そのように，「資本主義」という言葉は，19世紀前半の時期，とりわけ1830年代から40年代にかけてのフランスとイギリスにおける資本家的生産の発展とそれにもとづく資本主義的社会経済関係の展開がすすむなかで，あるいはピエール・ルルーのように，資本主義的産業の内部において労働者を酷使する資本家のありようを表現するために，あるいはルイ・ブランのように，労働者からの収奪によって収益（利子）を手に入れてますます豊かになっていく近代社会における資本主義的私的所有のもたらす事態をとらえ表現する用語として，さらには，サッカレーのように，一見もっともらしい分別をもったブルジョア的な気分をあらわすために，あらたに作られて使われた言葉に他ならない。

そのように，「資本主義」という用語は，1830～40年代の時期にフランスとイギリスにおいて急速に展開普及して社会的にその姿を明示的なかたちで示すようになってきている資本主義的経済関係にもとづく新しい事態にかかわる新しい言葉として生みだされてきたものであるが，しかし同時に，その「資本主義」という言葉は，さしあたりは，それぞれに異なる意味内容にお

けるものとして作られ使われているのである。

もともと，「主義 ism」という接尾語は，さまざまな意味合いをもった抽象名詞を作るのに使われるものであって，多様なかたちの用語法として使用されているものである。

そして，「資本 capital」という名詞に接合されて作られた「資本主義 capitalism」は，そもそもの言葉それ自体としては，資本にかかわるなんらかのありようや事態を示すものであるという言葉でしかなく，それ以上の特有の意味内容を「資本主義」という言葉それ自体において内包しているものではない。

それは，ピエール・ルルーのように「資本家の産業」における事態として「資本家」という言葉に触発されながら出てきたり，ルイ・ブランの場合のように，「資本の排他的専有」という特有のありようを示すものというかたちで「資本」とのかかわりを示すものとして使われるようになったり，あるいは，サッカレーにおけるように，直接的には「資本」とも「資本家」とも結びついたかたちで生みだされたものとしてではないけれども，ブルジョア的気分を概括的に表現するものとして使われているものである。

そのように，1850 年前後における「資本主義」という言葉の使われはじめの時期においては，それがいかなる言葉につながり関連するかたちで生みだされてきたものであるかについて見ても，異なる触発要因にもとづいて作られ使われた用語であることは明らかである。

ところで，この「資本主義」という新しい言葉は，そのように 19 世紀前半に新しく展開してきた資本主義的な現実的事態にもとづく新しい言葉として作りだされたものであるけれども，それを作りだした 19 世紀半ばの時期の時代精神にとってニュートラルな性格をもったものとして出てきたものではなかった，といえるようである。「資本主義」という言葉は，その発生の時期の時代精神にとって，「資本」や「資本家」にまつわる金儲け主義や私的利害の利己的追求あるいは金銭的利害とかかわる俗物的分別というものに

たいする批判的な意味合いや気分をもった言葉として作られ使われているものである。

すなわち，ピエール・ルルーやルイ・ブランのように近代社会における現実的事態における貧富の差の拡大や社会的な階級的分裂にたいして批判的であって，そのような矛盾を克服してより新たな共同社会や人間社会を志向する社会主義者としての立場にもとづきながらの現実把握や，あるいは，サッカレーのように，社会の現実をリアルに表現する文学作品を作りだすなかで，上層中流階級としての銀行家や企業経営者などにおけるブルジョア的俗物性やそれの影響についての心情と行動を風刺的に描写するなかで，作りだされ使われるようになった言葉である。

このことは，逆に，意識的にせよ，あるいは無意識的にせよ，資本主義的な近代社会において体制的立場に立つ理論や思想家にとっての，「資本主義」という言葉にたいする後々まで引き継がれていく嫌悪感や拒否的対応ともかかわるところである。

ところで，このような1850年前後に作られ使用されはじめた「資本主義」という用語のもつ意味内容は，20世紀の終了と21世紀を迎える現在の時点でのわれわれの世界において日常語として使われている「資本主義」という用語に含意されている規定的な意味内容とは，大きく異なるところがある。

すなわち，われわれの時代――資本主義と社会主義との2つの世界体制の対立の時代とソ連型社会主義の崩壊によるその解体，そしてその後の単一化した資本主義世界システムのカジノ化という20世紀における現実的な歴史的事態を経験している時代――において，一般に使われている「資本主義」という用語に含意されている近代社会特有の「経済体制」や「社会制度」としての規定的性格をもつものとしての意味内容は，ピエール・ルルーやルイ・ブランやサッカレーなどによって19世紀半ばの時期に使われはじめた「資本主義」語の規定的意義においてはまったく存在していなかったものである。

もともと「資本主義」という抽象名詞それ自体においては，近代社会の「経済制度」や「経済構造」あるいは「社会体制」の歴史的形態を示すものとしての意味内容は，言語的におのずから含意しているものではない。そして，「資本主義」という言葉が新しく生みだされた時期における用語法においても，そのような意味内容は存在しなかったものである。

では，いつから，誰によって，いかなるかたちで，そのような近代社会特有の「経済体制」や「社会制度」の歴史的形態を示すものとしての意味内容において，「資本主義」という用語の使い方がなされるようになったのか。この点についての追求は今後の取組みのなかでおこなうことにしたい。

〔注〕

1) Pierre Leroux, *Malthus et les économistes, ou, y aura-t-il toujours des pauvres ?* Boussac, 1848.

2) ピエール・ルルーの主要著書については，David Owen Evans, *Le socialisme romantique — Pierre Leroux et ses contemporains*, 1948, Paris, pp. 239–252 に拠っている。

3) J. Dubois, *Le vocabulaire politique et social en France de 1869 à 1872*, Librairie Larousse, Paris, 1962.

4) *Ibid.*, p. 238.

5) Evans, *op. cit.*, p. 249.

6) Pierre Leroux, *Malthus et les économistes, ou, y aura-t-il toujours des pauvres ?* Boussac, 1848, p. 25. in Evans, Le socialisme romantique — Pierre Leroux et ses contemporains, p. 81.

7) P. Leroux, *Malthus et les economistes, ou, y aura-t-il toujours des pauvres ?* Boussac, 1849, p. 28.

8) 阪上孝『フランス社会主義』新評論，1981 年，28 ページ。

9) 『岩波 哲学・思想事典』岩波書店，1998 年，1709 ページ。

10) 『世界名著大事典』第 8 巻，平凡社，1962 年，644 ページ。

11) Evans, *op. cit.*, pp. 223–238. 阪上孝，前掲書，27–29 ページ。

12) *Oxford Englisch Dictionary,* Second ed., Vol. XV, 1989, p. 910.

13) 稲子恒夫「社会主義」『日本大百科事典』第 11 巻，小学館，1988 年，271 ページ。

14) サンフォード・アラン・ラコフ「社会主義（古代からマルクスまで）」『西洋思想大事典』第 2 巻，平凡社，1990 年，406 ページ。

15） マルクス「共産主義とアウグスブルグ『アルゲマイネ・ツァイトゥング』」『マルクス＝エンゲルス全集』第1巻，124–125ページ。*MEW*-1, S.108.

16）「マルクスからフォイエルバッハへ」（1843年10月3日）『マルエン全集』第27巻364ページ。*MEW*-27, S.420.

17） エンゲルス「大陸における社会改革の進展」『マルエン全集』第1巻，531ページ。*MEW*-1, S.487–488.

18） マルクス・エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』『マルエン全集』第3巻，231–232ページ。*MEW*-3, S.213.

19）「マルクスからヨーゼフ・ヴァイデマイアーへ」（1849年12月19日）『マルエン全集』第27巻，439ページ。*MEW*-27, S.515.

20）「マルクスからヴァイデマイアーへ」（1852年3月25日）『マルエン全集』第28巻410ページ。*MEW*-28, S.511.

21）「マルクスからエンゲルスへ」（1852年3月30日）『マルエン全集』第28巻，35ページ。*MEW*-28, S.44.

22）「エンゲルスからベーベルへ」（1885年10月28日）『マルエン全集』第36巻，331ページ。*MEW*-36, S.378.

23） W. M. Thackeray, *The Newcomes,* Penguin Books, p.488.

24） マルクス「イギリスの中間階級」『マルエン全集』第10巻，655ページ。*MEW*-10, S.648.

25）「現代社会主義の創始者とのインタビュー」（『トリビューン』の特別通信）『マルエン全集』第34巻，421ページ。*MEW*-34, S.509.